

Title	現代日本語可能表現の意味と用法(Ⅲ)
Author(s)	小矢野, 哲夫
Citation	大阪外国語大学学報. 54 p.21-p.34
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80856
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅲ）

小矢野 哲 夫

On the Meaning and Uses of Japanese Potential Expressions (III)

Tetsuo KOYANO

The first part of this paper deals with two areas: one is the semantic and syntactic features of the verbs, *mieru*, “can see”, *kikoeru*, “can hear”, and *wakaru*, “can understand”, the meanings of which indicate potentiality and ability.

Secondly, the verb *tsutomaru*, “to be equal to”, which belongs to the group of neutral voice verbs, will be looked at.

This paper also attempts to clarify the relation between passive and causative voices, and potential expressions.

11. 「見える」「聞こえる」「わかる」のある種の用法

標記の各動詞の意味について、例えば『学研国語大辞典』には次のような記述がある。

「見える」

- ①目に存在が感じられる。目にうつる。
- ②見る能力がある。
- ③〔外見から判断して〕…に（と）見受けられる。…に（と）思われる。
- ④「来る」の尊敬語。おいでになる。

「聞こえる」

- ①音や声が耳に感じられる。
- ②受け取られる。解釈される。
- ③わけがわかる。すじが通る。
- ④〔うわさ・評判として〕つたわる。
- ⑤世に広く知れわたる。有名である。

「わかる」

- ☐《自五》はっきりしないでいた事が頭の中で整理されて明らかになる。
- ①知れなかった事が明らかになる。見たり聞いたりして、知ることができる。

- ②判断・理解することができて、意味内容が明らかになる。了解される。納得される。
- ③〔②から転じて〕人の気持ちや物事の事情をよく理解できる。世情に明るく、融通性がある。
- 事情を察して、人の気持ちを受け入れることができる。

㊦《他五》

- ①知らなかった事を明らかにする。理解する。
- ②人の気持ちや物事の事情をよく理解する。事情を察して、人の気持ちを受け入れる。

この節で扱うのは、「見える」の②, 「聞こえる」の①のような、それぞれ視覚・聴覚に関する意味の側面と、「わかる」の㊦②のような理解・判断に関する意味の側面である。従って、次の各例に見られる意味の側面は扱わない。

- 134) 窓からは、同じホテルの向かい側の窓しか見えないのよ。(『文体』Vol.2, p.198, 立松和平「ブリキの北回帰線」)
- 135) 雲が羊の群れに見える。
- 136) ～, 太鼓を打っていたのはなんと九十一歳のおばあさんだった。背中がしゃんとしていて、とてもそんな年には見えないが、～。 (大阪スポーツ 78.7.8)
- 137) 彼はこの件について何も知らされていないと見える。
- 138) ～, 自宅へ見えた大岡さんに何か一冊差上げたかも知れない。(『文体』Vol.2, p.12, 尾崎一雄の文章)
- 139) だから、小山陽が「天明のころのおはなしでございます」とわざわざ断っても、昔ばなしには聴こえない。(朝日・夕, 78.7.15)
- 140) 明かりは二本のロウソクだけで、後ろからは川のせせらぎが聞こえる。(毎日・夕, 78.7.4)
- 141) 静岡と静岡商は戦前から全国に聞こえた名門中の名門で、県都の人気を二分している。(毎日, 78.7.12)
- 142) そんな言い方をされたのでは、私一人が悪者みたいに聞こえるではありませんか。
- 143) 長年捜していた友人の消息がやっとわかった。
- 144) 同時に、北と南に分かれているメソポタミア文明の中間に位置することから、メソポタミア文明の伝播を「点」から「面」としてとらえ得るかも知れないとわかった。(朝日・夕, 78.6.16)
- 145) 名前のわからない暗い駅に止まったきり汽車は動かなくなった。(『文体』Vol.2, p.153, 立松「ブリキの北回帰線」)
- 146) 「いうつもりじゃなかったんだけど、義姉さん^{おねえ}に分かっちゃって、それで兄にも知られちゃったの」(『群像』77年4月号 高橋三千綱「たとえば風に向かって」)

まず、視覚・聴覚の「見える」「聞こえる」について見て行く。この動詞は二種類の文型の違いとして区別することができる。一つは「…が見える/聞こえる」の文型で示され、「…」の部分に

対象となる事物・事態が表わされる。先ほどの文134, 140と次の文147と148がそうである。

147) 列車の窓から茶摘みをしているのが見える。

148) 下宿屋の娘が階下で長唄の稽古をしているのが聞こえる。

これらの文には、見たり聞いたりしている知覚の主体としての「経験者」が表わされていない。現実の事態としては、この文を表現した者が見たり聞いたりしているのではあるけれども、この文型は、視覚的な対象なり聴覚的な対象なりが、感覚器官の目や耳に入ってくるという捉え方で現象を描写する型である。この種の文型は、前記のように、本稿の「可能表現」の範囲に入らない。

もう一つは、知覚の経験者を文中に表わす文型である。この文型は、

$$N_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{に} \\ \text{には} \\ \text{は} \end{array} \right\} N_2 \text{ が } V$$

の形をとることが多い。これを、二つの名詞の意味論的選択制限の組合せによって、さらに二つの型に区分することができる。一つは、「私は目が見える」「私は耳が聞こえる」のように N_1 (知覚の主体となる有情物), N_2 (有情物の身体の一部である感覚器官)の組合せであり、他の一つは, N_1 (有情物または感覚器官), N_2 (知覚の対象となる事物・事態)の組合せである。このような条件のもとで、この文型が「見える」「聞こえる」の可能表現の用法の範囲に入るわけである。

149) 私には沖の方に白帆が見えますよ。

150) 私には家の外で人の話し声が聞こえるんだが。

この文は、他の人には見えない、または聞こえない対象が、私にだけは知覚されるという、一回限りの現実的で個別的な知覚現象を描写する用法に属するものと解釈できる。

これに対して次の文151, 152は

151) 私には千里も先のものが見えます。

152) 私には3万サイクルの音が聞こえます。

知覚の対象が現実の人間の知覚能力を超えているために、極めて特殊な個人的能力として備わった属性を表現する用法に属するものと解釈できる。

文149～152はいずれも現在形の用法である。そして、一方は、視覚が現在の時点において実現していることを表わし、他方は、現在の時点で視覚が実現されてはいないが、能力として潜在していることを表わす、と言い換えることができる。現在形でのこのような意味の違いは、既に可能動詞の現在形用法で見た違いと対応する側面である。例えば、

153) ほら、母さん。ぼく、泳げるよ。

と言えば、現在実際に泳いでいるところで、泳ぐことができるようになったことを表わし、

154) ぼくは、百米も泳げるよ。

と言えば、百米を泳ぐ能力があることを表わす。これと同じ関係である。ただし、可能動詞のこの用法では、ほとんどの場合、その元になった動詞に「ことができる」を付けた形に言い換える(153' 154')のに対して、「見える」「聞こえる」では、対応する他動詞「見る」「聞く」に「ことができる」を付けた形は、能力の潜在を表わす場合だけに言い換えが可能だ(149'—152')という違いがある。

153') ほら、母さん。ぼく、泳ぐことができるよ。

154') ぼくは、百米も泳ぐことができるよ。

149') ? 私には沖の方に白帆を見ることができますよ。

150') ? 私には家の外で人の話し声を聞くことができるんだが。

151') 私には千里も先のものを見ることができますよ。

152') 私には3万サイクルの音を聞くことができます。

過去形にすると、能力が実現したことを表わすことは、次の例155が示している。

155) 「いや、蜃気楼だ。蜃気楼というものは、誰にでも見えるものではない。心清く、心平らかなる者の眼にだけ見える。君も、お蔭で、蜃気楼を見ることができた。～」(井上靖『流沙』『アム・ダリア』)

次に、「見える」と「見る」及び「聞こえる」と「聞く」の自他の対応関係に関連して、「見える」と「見られる」及び「聞こえる」と「聞ける」の意味に違いがあるのかないのかが問題となる。歴史的な変遷の過程を考慮に入れて現代語における様子を見ると、次に示すような併存の状態が見られる。

起 源

現代語

見る＋ゆ＝見ゆ	見える
見る＋らる＝見らる	見られる
聞く＋ゆ＝聞かゆ	聞こえる
聞く＋る＝聞かる	聞かれる
聞ける ¹⁾	聞ける

「見ゆ」と「聞かゆ」は、歴史的変化の規則に従えば「見らる」「聞かる」の形になり、古い形が消え去るはずであるが、そうはならず、そのまま残り、新しく生まれた「見らる」「聞かる」と併存することになった。さらに「聞かる」は「聞く」の可能動詞形の成立によって「聞かれる」と「聞ける」の併存となり、「聞ける」優勢の状態へと移行してきた。現代語において、このように「見える」と「見られる」及び「聞こえる」と「聞ける」が共存しているということは、それぞれに異なった意味・用法を託されているものとして考えることができる。

「見える」と「見られる」の異同については、森田良行(1977)の指摘がある。すなわち、「見える」は「“見ることができる”可能の意味を含むが、これは“能力”という主体の状態で、客観

的な条件としての“可能”を表しているのではない」(p.432)として、「おもてから見えるよ。カーテンを引きなさい」などは「自然に目に入る状態なので、可能『見られる』への置き換えはできない」(同上)、「空気が澄んでいるので富士山が見える」などは「客観的な条件設定が伴うので、『見られる』で言い換えることも可能」(同上)、「今日は夜会議がないのでテレビ映画が見られる」などは「たとえ条件が実現したところで、対象が自然と視野に入ってくるような状況設定ではないので、『見える』と置き換えることはできない」(同上)としている。

視力のあることを表わす「目が見える」の場合を除くと、「見える」と「見られる」とは、現象としては、外界の事物・事態が目映像を結んで知覚されることで共通するが、両者の違いを、客観的条件が設定されているかいないかに求めるよりも、動作主体としての有情物が意志的行為として「見る」ことが成立することを「見る」と「られる」とで文法的に表現するのが「見られる」であり、「見える」は無意志的な現象で、有情物が経験者として位置付けられる表現である、と説明するほうが、両者の意味の質的な違いを明らかにしうるのではなかろうか。

Inoue (1974)は、次のように、可能の「見える」「聞こえる」を、そうでないものと区別している。

As was listed at the beginning of this section, (a-i) has *kikoe-ru* (be heard) and *mie-ru* (be seen) for its members. It is well known that the same phonological forms represent potential verbs *kiko-e-ru* (can hear) and *mi-e-ru* (can see). It is indeed possible to make potential forms out of the verbs of smelling, touching, and tasting; namely, *nio-e-ru*, *kag-e-ru* (can smell), *sawar-e-ru* (can touch), and *aziwa-e-ru* (can taste). However, they never function as intransitive verbs expressing Experiencer's sensory perception, as in the case with *kikoe-ru* and *mie-ru*. For some unknown reason, only *kiko-e-ru* and *mi-e-ru* were lexicalized as transitive verbs.²⁾

(p. 144)

しかし、いわゆる可能動詞一般が、元になる五段活用動詞の語幹に可能を表わす要素 *-eru* を付けて「書く」→「書ける」(*kak-u* → *kak-eru*) のように規則的に形成されるのに対して、「見える」「聞こえる」の場合は、これだけが現代語において特殊なあり方を示しているものであって、可能動詞と同様の規則化の中にも含めることは無理である。すなわち、例えば、*mi-e-ru* の *-e-* に可能の意味素性を担わせるといった説明は、分析のしすぎであると思われる。文型と、名詞の意味論的選択制限の組合せの型とによって、通常の自動詞用法と可能の用法とを区別するだけで十分であろう。

「聞こえる」と「聞ける」についても、「見える」と「見られる」の場合とほぼ同様の説明が適用する。「聞こえる」は「見える」と同様に、有情物という場所において、無意志的な現象として外界の音や声が知覚されることを表現の本質としており、有情物の「聞く」という意志的な行為が実現することを表わす場合は可能動詞形「聞ける」が使われる。

「見える」「聞こえる」について最後に、事物の性能を表わす用法に言及しておく。

156) この双眼鏡は1キロ先のものが見える。

157) このラジオは短波放送がよく聞こえる。

この文のように、「 N_1 は N_2 がV」の文型で、 N_1 に見たり聞いたりする手段としての道具を表わす名詞が用いられる場合である。これは、「見える」「聞こえる」が[+状態性]という意味素性を持つことによって、事物の属性（この場合は性能）を表わす用法である。この N_1 が述語動詞との間にどんな格関係を結ぶのか、規則の中で位置付けるには至っていないが、動作を表わす「私は双眼鏡で1キロ先のものを見た」「私はラジオで短波放送を聞いた」の下線部の名詞句のような道具格とは性質が違うようである。なお、

158) この双眼鏡で1キロ先のものが $\left\{ \begin{array}{l} \text{見える。} \\ \text{見られる。} \end{array} \right.$

159) このラジオで短波放送が $\left\{ \begin{array}{l} * \text{聞こえる。} \\ \text{聞ける。} \end{array} \right.$

のような現象が見られるが、この「 N_1 で」の統語論上の位置付けも、まだわからない。

最後に「わかる」について。この動詞は、有情物の無意志動作を表わす点で、次節の「うかる」「たすかる」などと共通するが、「うかる」—「うける」, 「たすかる」—「たすける」のように対応する他動詞を欠いている。他方、この動詞は「見える」「聞こえる」と同様の文型をとる。ここでは、後者の類似性にもとづいて、この節で扱うことにする。その文型は次のようである。

$$N_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{に} \\ \text{には} \\ \text{は} \end{array} \right\} N_2 \text{がわかる}$$

N_1 は有情物で、経験者格に立ち、 N_2 は事物・事態で、理解行為の対象格に立つという関係にある。

この動詞を可能表現の一つとして扱う根拠は、いまその一部を簡単に示したが、牧野成一 (1973) は六つの根拠を明示している。要点を記すと次のようである。

- i) 「わかる」も可能形も受身形をとれない。³⁾
- ii) 表層構造では「わかる」も可能形もNPはNPがVerbの構造をとる。
- iii) 「わかる」も可能形も従属文中—特に名詞化節(すなわち、文+の/こと)や関係節の中—でNPはNPがVerbの「は」が与格(=dative)の「に」で出てくる。
- iv) 表層構造では、「わかる」も可能形もNPがNPがVerbの構造は非文法的かひじょうにおかしな文となる。
- v) 「～てみる」「～ておく」「～てある」は「わかる」とも可能形とも共起できない。両者とも単文中では「～ようとする」「～してもらう」をとれないし、「いやいや」「わざわざ」といった心的態度を表わす副詞とも共起できない。

vi) 「わかる」も可能形も命令形をとれない。

このような根拠を示し、可能形との相違もあるとしたうえで、「『分かる』はまったく純粋な可能動詞ではなくて、『可能』以外に少なくとも『過程』、『状態』という意味特徴をもっていると言えよう」(p.15)と述べている。筆者もこの指摘を支持し、付け加えることはないが、具体的な用法において、どのような意味に解釈できるかを見ておく。

160) 「～。それにしても報告書の内容は難解すぎる。労働者や主婦にもわかるようにしてほしい」(坪井俊二代表委員)と皮肉をまじえながら歓迎の弁だ。(朝日・夕, 78. 7. 15)

161) ただの一度も考えなかったことはなく、ほとんどその内容はふしぎなほど多様であるのは、どういうわけか自分にも分からない。(『文体』Vol.2, p.134, 小島信夫「ルーツ＊前書」)

162) また稲作は理科や社会の単元に出ており、それを額に汗し、手にマメをつくる勤労の喜びとともに体験させようという教育的な意義も、農林省のお役人には分からない。というより、⁴⁾分かるうとししない。(毎日, 78. 6. 22)

これらの用例において、「わかる」は「理解できる」と言い換えることができる。しかし、「わかる」と「理解できる」とは同じ意味を表わしているわけではない。「理解できる」が、有情物による意志的動作（他動詞「理解する」）の実現（「できる」）を形の上で分析的に表現しているのに対して、「わかる」は、思考し、理解した結果であれ、直感的な理解であれ、知的な活動として実現することを、無意志的な動作として表わす。この動詞が現在形終止用法で使われて、

163) 彼にはポルトガル語がわかる。

のように、彼に備わった属性としての理解能力を表わしたり、

164) 私にはあなたのお今の気持ち痛いほどよくわかる。

のように、一時的な現象として、理解が実現していることを表わしたりすることは、「見える」「聞こえる」の場合と同様であり、可能動詞、可能の助動詞、「できる」の表現と同様である。

12. 「うかる」「たずかる」「つとまる」「もうかる」などの用法

この節の標題に例示した動詞を可能表現の形式として認めることに異論があるかもしれない。⁵⁾筆者自身も全面的に認める立場で示したのではない。宮島達夫(1977)の中に指摘されているもので、これを検討するためにこの節を設けたわけである。

宮島は、動詞の意味特徴の記述において、「主体」「対象」「動作・作用の属性」「環境」「結果」「意図」「原因」「評価」などの観点をとる。このうち「意図」の観点から「動詞を意志的な動作をあらわすかどうかという点で分類」する。その場合「動詞のムードの形のありなしを基準にして」、(A)「有情物の意志的動作」、(B)「有情物の無意志動作」、(C)「非情物の動き」の三つに大別する。このうち、(B)の類型の中に「可能動詞的なもの」として次のような指摘がなされている。

つぎに可能動詞的なもの。これも本人の力ではどうにもならないものである。

うかる、たすかる、つとまる、もうかる。

などは、可能の意味をふくむことが形の上ではっきりしている。このほか

ありつく、える、しおおせる、しこなす、とげる、得する、まぬがれる、みてとる、わかる。など。これらの動詞については、命令・禁止とも言いにくい。

「ゆきつく」もこの類かもしれない。逆に、「みかねる」「待ちかねる」など、不可能の意味をあらわすものもある。(pp.426—427)

この指摘の中の「可能」という用語は、有情物において、ある事態がその本人の意志によらずに実現することとでもいった意味合いで理解してよいと思われる。しかし、「自発」とは区別されているようである。

もう一つ、「可能の意味をふくむことが形の上ではっきりしている」というのは、対応する他動詞の語尾-eruに対して、-aruを共有していることをさすと考えられる。しかし、-eru / -aruの形での他動詞と自動詞の対応が、すべての場合に当てはまるわけではなく、「授ける—授かる」「預ける—預かる」「決める—決まる」などの自動詞に可能の意味合いを認めることはむづかしい。この問題では「中相態」と「自発（自然可能態）」がかかわってくるので、相互の関係を見ておく。

金田一春彦（1957）によれば、中相態とは「受動的な意味をもった、受動態ならざる自動詞」（p.239）で、「煮える」「売れる」「くずれる」「決まる」「授かる」「教わる」「預かる」などは「中相動詞」と呼べるものである。ここに例示した動詞はすべて、例えば「煮える」が「煮た状態になる」というように、対応する他動詞の表わす動作が実現した状態になること、すなわち、「状態の変化」という意味が加わる。また、中相態に似たものに「自然可能態」と「自然受動態」があるという。この両者は「自然に……になる」という意味をもつ点で似ているが、自然可能態に受動の意味がなく、自然可能態が二格の補足語をとる点で異なるという。必ずしも明示的に規定されているわけではないが、意をくんで三者を対比すると次の図ようになる。（+はその特徴をもち、－はその特徴をもたないことを示す。）

特徴 ボイス	状態の変化	自然に…になる	二格の補足語をとる	受動の意味
中 相 態	+	—	—	+
自然可能態	—	+	—	—
自然受動態	—	+	+	+

この点から「うかる」などを検討すると、「自然に……になる」の意味を含まず、状態の変化の意味が加わっていることで、中相態に属すると言えよう。次に、「～した状態になる」との言い換えができるかどうかについては、「うかる」の場合にそれができない。

このようなくいちがいは、宮島と金田一とで分類の基準が異なるために生じるのだと言ってし

まえば事は簡単だが、その基準にも相互に関連する事柄があるために、複雑になっている。金田一は動詞のボイス (Voice) の観点を基準とし、宮島は動詞の意味特徴の観点を基準としている。

金田一 (1957) はボイスをこう規定している。

動詞のヴォイス (相) とは、主語がその動詞の表わす動作・作用に対してどのような関係に立つかを表わし分ける語形変化である。ふつうには、能動態と受動態と使役態、さらに中相態を設ける。(p.235)

この規定には先の「自然可能態」と「自然受動態」も含まれると思うが、金田一はこの他に、大槻文彦と三矢重松の認めたボイス「可能態」と「敬讓態」に言及して、「これらは意味の上から、ヴォイスとはかなり性格がちがう」(p.241) こと、すなわち、可能態の場合、「書ける」「見られる」などの形は、「全体が一種の状態性動詞である点で」(同上) 通常のボイスと異なっていると述べている。そして、可能態は「『…シナケレバナラナイ』や『…シテモヨイ』などという形と同じ種類のもので、その動作に関する外的な制約のちがいを表わす変化というべきものの一種である。」(p.241) と、ボイスから除外する立場である。ここで「動作・作用」という用語と「状態」という用語を厳密に区別するならば、状態を表わす動詞はすべて、ボイスの規定に入らないことになる。

ボイスの規定と可能の関係で、金田一に近い立場が次に見られる。

動作には、動作主体・動作対象など、動作関係者があり、文には、主語・対象語 (目的語) など、文の成分がある。ボイスとは、どの動作関係者をどの成分であらわすかについての文法的なカテゴリーである。(中略)「くえる」「たべられる」のような可能動詞は、「わたしには菓子がたべられない」のように、動作主体を二格、動作対象をガ格であらわす構文形式があったり、「この菓子はたべられない」のように動作対象を主語にしたりする点にあって受身にちがいが、「おれは菓子をくえる」ともいえるし、また、「くわれる→くえる」「たべられる→たべれる」という、受動形式からの形態的な独立も進行していて、ボイスからの解放過程にあるといえるだろう。(高橋太郎 (1980))

これに対して、ボイスの中に可能を認める立場がある。鈴木重幸 (1972b) はボイスを「たちば」という用語で表わし、次のように規定する。

動詞のたちば (voice) とは、動詞のあらわす動き・状態の主体・対象やそれに関係する第三者と主語・対象語との関係をあらわす文法的なカテゴリーである。すなわち、動詞のたちばによって、動詞の語法的な意味としてしめされる動き・状態の主体・対象やそれになんらかの関係にある第三者などの、どれを主語とし、どれを対象語としてあらわすかがきめられるのである。(pp. 275—276)

そして、「うけみのたちば」、「つかいだてのたちば」(いわゆる使役)、「できるたちば」を認め、可能を次のように位置付ける。

できるたちば (可能のたちば) は、もとになるたちばの動詞のしめす動きの可能性、能力をもつものを主語として表現するたちばである。(p.290)

もとなるたちばの動詞のしめす動きの主体は、できるたちばの動詞にあっても、主語であらわされるのがふつうである。この場合、述語は、もとの動きの可能性、能力、あるいはその実現をあらわす。(p.291)

このように見てくると、ボイスをどのように規定するか、可能をどのように規定するかということが重要な問題であることがわかる。これについては、次節でさらに考えることにし、ボイスの問題から一応離れて、「うかる」―「うける」のような自他の対応と可能表現との関係を見ることにする。この場合、それぞれの動詞の意味を、可能と関係のありそうな、

「うかる」＝「〔試験に〕合格する」

「たすかる」＝「死をまぬがれる」

「つとまる」＝「〔その職務に耐えて〕勤めることができる」

「もうかる」＝「金銭上の利益がある」

(いずれも『学研国語大辞典』による)

に限定する。

既に見てきたように、可能の表現形式は多くの場合、もとなる動詞、または対応する動詞のとの文型との間に次のような関係が見られた。

$$\left\{ \begin{array}{l} N_1 \text{ が } N_2 \text{ を } V \\ N_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{に} \\ \text{には} \\ \text{は} \end{array} \right\} N_2 \text{ が } V\text{-potential}^{7)} \end{array} \right.$$

ところで、「うかる」などは次のような対応関係にある。

- 165) a. 太郎がA大学を受けた。
b. 太郎がA大学に受かった。
- 166) a. 太郎が次郎(の命)を助けた。
b. 次郎は(命が)助かった。
- 167) a. 太郎が議長をつとめた。
b. 太郎に議長がつとまった。
- 168) a. 太郎が金をもうけた。
b. 太郎は金ともうかった。

166の対応関係は、 N_1 が別の名詞に変わる点で他の多くの可能の表現形式に見られたものと大きく異なっている。165は、能動文の対象格「 N_2 を」が、「を→が」変換規則に従わず、「 N_2 に」となっている点で異なる。意味の点でも、165は「受ける」が「受験する」ことで「受かる」が「合格する」こと、と対応関係が異質である。このような点で、「うかる」と「たすかる」は可能を表わすとは認めにくい。次いで168は、「 N_1 に」の形をとりにくい点でやや性質が違うようである。また、

「もうけることができる」と「もうかる」とが同じ意味を表わすとは、必ずしも言えない。167—bは、前節「わかる」のところで言及した牧野(1973)の「可能形」の特徴とすべての点で適合し、通常の国語辞典に記述してある「勤めることができる」といった形での言い換えも妥当である。この結果、可能の表現形式と認めうるのは、この167—bということになる。

他の三つの動詞は、ボイスの観点から、「たすかる」と「もうかる」を中相態の動詞と言ってもよさそうである。「うかる」は、「うける」と対応すると言ったが、それは形態上での対応であって、意味上の対応は見られない。従って、これらの動詞は別に扱わなければならないのだが、本稿では扱いきれない。

13. 可能表現の範囲と文法範疇上の位置付け——ボイス・アスペクト・ムードなどとの関係

「可能表現」とは何かと問われたとき、まず最初に思い浮かぶのは、おそらく、有情物の能力という意味だろう。しかし、例えば動詞「書ける」の語彙的意味は何であるかと問われて、「書く能力がある」ことだと答えても正解とは言えない。なぜならば、「書く能力がある」というのは、「書ける」が現在形終止用法で、有情物の恒常的な属性を表わす場合に認められる具体的な意味の一つにすぎないからである。動詞「書ける」に他の色々な具体的意味のあることは、既に見てきたところから明らかであろう。では、それら種々の具体的意味から、例えば可能動詞の、語彙的意味を抽象することに成功したかと言えば、否と答えざるを得ない。仮りに「書ける」を、「書くことが実現する態勢にある」と記述しても、過去形に実現される具体的な意味には適用できない。なぜならば、「やっとレポートが書けた」という文の「書けた」は、「……態勢にあった」ことを意味しているのではなく、「実現した」ことを意味しているからである。従って、可能動詞は「+状態性」という意味素性を持つと言われることがあっても、形容詞のもつような「+状態性」とは同一ではないか、あるいは他の意味素性をも付け加えなければならないのである。

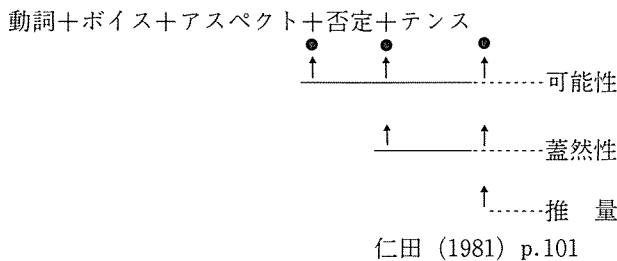
「このレポートは1週間で書ける」という文の「1週間で」は「書ける」に対して、「1週間」と期限をつけて、その期限内に、書き始め、書き続けて、書き上げるという一連の動作が実現する態勢にあることの、一連の過程を限定するという関係に立っている。可能動詞の意味素性に「+過程性」といったものが認められるのかもしれない。しかし、いずれにしても、これだけでは不十分であって、本稿(I, II, III)を通じて、可能の表現形式の語彙的意味の記述を目指しはしたが、具体的な用法における意味の現われ方を部分的に観察するにとどまった。

この節では、本稿のしめくりとして、可能の表現形式としてどの範囲まで認めるのか、また可能は文法論上どの範疇に属するのかを考える。

金子尚一(1979)⁸⁾は、可能表現に、「ちからの可能(“できる”の意味を問題にする可能)」(potential concerned with the concept of “power”)と「認識の可能(“みこみ”の存在を問題にする可能)」(potential concerned with “epistemic possibility”)との対立を考えている。「ちから

の可能」は、本稿の、いわゆる可能動詞を用いるものと可能の助動詞「れる」「られる」を用いるものと動詞「できる」を用いるもの、によって表わされる可能にあたり、「認識の可能」は、本稿の「動詞＋得る」によって表わされる可能にあたる。この二種類の可能は、典型的には、金子の規定の上でも、また概念的にも、対立する性格のものと言える。しかし、「ちからの可能」の意味を担う形式は、用法上、可能動詞を用いて有情物を経験者格に立てる、能力の表現をその典型として一方の極に持ちながら、「れる」「られる」から「できる」へと並ぶ形で、次第に、事態成立の可能性を表わす「認識の可能」へと近付いていく勢いを含んでいると考えられる。また、本稿で認めた他の表現形式、「可能だ」「不可能だ」「動詞＋かねる(肯定形)」「動詞＋がたい」なども、どの順序でかはわからないが、「ちからの可能」に属するとしても「認識の可能」にかなり近いところに位置付けうと思う。

仁田義雄(1981)は「〜ルことがある」を中心に、「公算がある」「恐れがある」「可能性がある」「かもしれない」「にちがいない」などを、「可能性・蓋然性の擬似ムード (Quasi-Mood)」と呼んで、推量のムードとの関係を考察し、これらの擬似ムードを次の図の中に位置付けている。



仁田の「可能性・蓋然性の擬似ムード」は、金子の「認識の可能」に相当する側面をもっていると考えられる。このことを考慮に入れると、可能表現の範囲を、有情物の能力を表わす可能から、可能性・蓋然性を表わす可能まで、その間に質的に異なるものを含むけれども、連続した表現形式として認めることができる。

次に、これらの可能の表現形式とボイス、アスペクト、ムードとの関係を見る。

ボイスの概念に定説のないことは、前節に引用した金田一(1957)、高橋(1980)、鈴木(1972b)からうかがえよう。問題は、可能の表現形式が、能動・受身・使役など同様の文法範疇に入ると認めるか認めないかである。金田一は「動詞の表わす動作・作用」に対する関係のあり方による語形変化をボイスと規定して、可能表現を状態性のものだと除外する。鈴木は「状態」における関係のあり方にもボイスを認めている。

この問題は、可能の表現形式の意味特徴を検討することによって、一つの解答を与えることができると思われる。金田一が「状態性動詞」だとした「書ける」「見られる」における「状態性」は、この節の始めに述べたように、現在形終止用法に現われる一つの意味であり、形容詞一般のもつ

〔＋状態性〕の意味素性とも異質であろう。「書ける」「見られる」などが動詞ないしはそれ相当の文法的機能をもっており、形容詞の文法的機能と異なることは言うまでもない。このほかに、形容詞が、「花が美しかった」「ぼくは水がほしかった」のような過去形の表現でも、過去の状態を表わすだけで、状態の変化といった意味を表わしえないのに対して、可能動詞「れる」「られる」, 「できる」などは、過去形において、能力・可能性の実現を表わしうる点でも相違する。先ほど〔＋過程性〕のような素性を認めうると言ったのもこのことに関連している。可能の表現形式の語彙的意味の記述は残された課題であるけれども、以上のように考えれば、これらの可能の表現形式が広い意味での「動作・作用」を表わすと言え、金田一のボイスの仲間入りの条件を満たすことになる。

次に、可能と他のボイス及びアスペクトとの相互承接のあり方を見ると、表現形式の間で違いのあることがわかる。

可能動詞は、使役及び受身の表現形式のあとに続くことができない。また、原則として、アスペクト形式素をあとに付けることができない。仁田(1981)の図式の「動詞＋ボイス＋アスペクト」の承接関係全体が、可能動詞として融け合っているようなあり方である。

「られる」は、動詞の直後に接続するか、使役のあとに接続するが、受身のあとには接続しない。「られる」のあとにアスペクト形式素を付けることができない。「弟が兄に英語を教え⁹⁾られる」という文が「られる」の意味・機能によって可能にも受身にも解釈しうるのは、各ボイスの相互承接の関係において、受身の場合の「動詞＋使役＋受身＋アスペクト」の承接関係と、可能の場合の「動詞＋使役＋アスペクト＋可能」の承接関係とに見られるような排他的な性格の、いわば接点にあたる用法で、ボイスとしての受身と可能の近さを示している。

「できる」は、「勉強できる」「勉強ができる」「勉強することができる」の形式の中で、前の二つが使役も受身も介入させえない点で可能動詞に近く、三番目が「勉強させることができる」のように使役を包むことができるが、受身は入れられない点で「られる」に近い。

以上のことから、これらの可能の表現形式を、受身に近いボイスとして位置付けることができると考える。

可能とムードとの関係は、仁田(1981)の「擬似ムード」または金子(1979)の「認識の可能」が、ボイスとしての可能とは異質ではあるけれども、仁田の指摘のように、ムードへと連続していく性質をもっているようである。

なお、可能の表現形式の中で、金子の言う「ちからの可能」に属するものの、現在形終止用法における一つの具体的な意味として認めうる「許可」ないしは現在形否定終止用法での「禁止」といった意味は、表現者(話し手・書き手)が対者(聞き手・読み手)に対して事態のあり方を規制する表現類型に位置付けて考察すべき問題であり、今後の課題として残されている。

(1981. 5. 30. 完)

〔注〕

*出所の明記してない文は、すべて筆者の作例である。

- (1) 可能動詞一般の成立に関しては、坂梨隆三 (1969) と渡辺実 (1969) を参照されたい。
- (2) 次のような原注がある。

Among perception verbs, only *kikoe-ru* and *mie-ru* can be said to have been lexicalized. However, the parallelism between potential forms and lexicalized intransitives is extensive, as in *tor-e-ru* (can be taken) and *tore-ru* (be taken), *kir-e-ru* (can be cut) and *kire-ru* (be cut), *war-e-ru* (can be broken) and *ware-ru* (be broken). It is also possible to analyze the latter into Verb + intransitive formative *e*. (p.160)

- (3) 井上和子 (1976) は「受動文、可能文は互いの補文になれない。」(p.105)と説明している。このことは第13節でも言及する。
- (4) 「わかる」の他動詞用法である。「学研国語大辞典」はこの用法を認めている。
- (5) 前稿 (同題の(Ⅱ)) の最後のところで、「うかる」「たすかる」「もうかる」を「可能表現の、やはり間接的な表現形式として考えてもよいと思われる」(pp.33)と述べたが、後述するように、可能の表現形式から除外する。
- (6) 動詞の自他の対応については西尾寅弥 (1954) と奥津敬一郎 (1967) を参照されたい。
- (7) この図式はTeramura (1975) (前々稿 (Ⅰ)) p.86に示した) のものを、ここでの説明の便宜上、一部変えた。
- (8) 金子論文の続稿をまだ見ていない。(稿了後、金子 (1981) を見たが間に合わなかった。)
- (9) 文例ともに、田中章夫氏のご教示による。

参 考 文 献 (追加)

- 陸山昭子 (1978)「『見える』とそのスペイン語訳—『坊っちゃん』『砂の女』を通じて」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研 究留学生別科) 第8号 pp.97-114
- 金子尚一 (1979)「可能表現の形式と意味 (Ⅰ) —“ちからの可能”と“認識の可能”について—」『共立女子短期大学 文科 紀要』第23号 pp.62-76
- 金子尚一 (1981)「能力可能と認識可能をめぐって」『教育国語』65
- 西尾寅弥 (1954)「動詞の派生について—自他対立の型による—」『国語学』17集 pp.105-117
- 仁田義雄 (1981)「可能性・蓋然性を表わす擬似ムード」『国語と国文学』第58巻第5号 pp.88-102
- 大河内康憲 (1980)「中国語の可能表現」『日本語教育』41号 pp.61-73
- 佐伯哲夫 (1974)「存在文」『国文学』(関西大学国文学会) 第50号 pp.105-130
- 坂梨隆三 (1969)「いわゆる可能動詞の成立について」『国語と国文学』第46巻第11号 pp.34-46
- 佐久間鼎 (1961)『現代日本語の表現と語法〈増補版〉』厚生閣
- 鈴木重幸 (1972b)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高橋太郎 (1980)「ボイス」『国語学大辞典』東京堂出版
- 鶴岡昭夫 (1967)「江戸語・東京語における可能表現の変遷について」『国文学 言語と文芸』(東京教育大学国語国文学会編) 第54号 pp.54-63
- 渡辺実 (1969)「『行ける』『見れる』—口語における助動詞複合の問題—」『月刊文法』第1巻第8号 pp.18-25